法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-08-31

蘭学者の地域的・階層的研究 : 門人録の分析を繞って

片桐, 一男 / KATAGIRI, Kazuo

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
59
(終了ページ / End Page)
73
(発行年 / Year)
1960-10-08
(URL)
https://doi.org/10.15002/00011806

Hosei University Repository

蘭学者の地域的・階層的研究

――門人録の分析を繞って――

片桐一男

目次

一、蘭学と蘭学者の定義
二、蘭学塾生徒の地域的分布と出身階層
1　芝蘭堂　9　静修堂
2　小森玄良の塾　10　鳩居堂
3　迎翠堂　11　松本良順の塾
4　蘭馨堂　12　順天堂塾
5　鳴滝学舎　13　青木周弼の門人
6　象先堂　14　箕作阮甫の門人
7　適々斎塾　15　高島秋帆の門人
8　佐久間象山の塾　16　江川坦庵の門人
三、結　語

蘭学という名辞の発生に関して、杉田玄白は蘭学事始下巻の首においてその由来を述べている。すなわち江戸において前野良沢・杉田玄白・中川淳庵等がかの有名な解体新書の飜訳を非常な苦心と努力のうちに完成したのが明和八年―安永三年であったが、その時「社中にて誰いふともなく蘭学といへる新名を首唱し、わが東方闔州（にっぽんそうこくじゅう）、自然と通称となるにも至れり。これ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり」[1]というのである。また蘭学の概念については、天明三年に成った大槻玄沢の蘭学階梯の例言に「蘭学トハ即チ和蘭ノ学問ト云フコトニテ、阿蘭陀ノ学問ヲスルコトナリ」[2]と明記している。この阿蘭陀の学問の内容をあげてみるならば

1、オランダ語学
2、医学・本草学系統の学問
3、天文学・地理学系統の学問
4、兵学系統の学問
5、人文科学系統の学問

一　蘭学と蘭学者の定義

先ず蘭学と蘭学者を定義し、その範疇について考察しておく必要がある。

Hosei University Repository

という区分が行われている。(3)

このように蘭学とは、和蘭の学問の略で、江戸時代に右の五系統の内容をもって摂受された学問・技術・思想のことと解せられる。

しからば蘭学者とは、右にいう蘭学をとりいれ、研究し、実用に供すべく努力した人々ということができるが、これを学習と成果の二点からみて次の如く蘭学者を大別できよう。

1、蘭人直伝

蘭人からオランダ語を習得し、時には科学的技術の伝授を受け、飜訳書等の業績を残した人々。

2、蘭書（他の外国語の蘭語訳も含む）利用・読解

蘭書を読み研鑽努力して著書訳書等の業績を残した人々。

3、右1・2の蘭学者から教授を得、彼らの著訳書を読んで蘭学に深い関心を示し、当時代に社会的影響を及ぼすに顕著であった人々。(4)

右のうち1・2に属する者が本格的蘭学者といえる。特に1は熟達したオランダ語の基礎の上に、技術を体得し、飜訳をなし、時には蘭文も書くという程の実力を有し、学問的業績は大きい。例えば通詞にして蘭学をやった人、シーボルトの鳴滝学舎兼診療所で伝授を受けた人々などはこれに属する。しかし幕末になって海軍伝習が行われた際、蘭人教師の指導を受けたといっても全員オランダ語に通じていたとはいえないのであるが、2に属する人々は数多い。有名な蘭学塾に学び、成長した人が多い。後に言及する大槻玄沢の芝蘭堂や緒方洪庵の適塾等で育成された人。3については蘭学を広義に解釈せねばならない。この範疇の人々は蘭学攻究の徒というよりは蘭学者と交際をし、書物を読んで知見を広め、その方面で活躍した人々であって、その社会的影響力は高く評価されねばならなく、彼等の活動と貢献は史上決して無視することができない。例えば林子平・本多利明・三浦梅園。

次に、蘭学の発達をみる場合にオランダより舶載された書籍及び文物の研究と同時に人的研究はいうまでもなく不可分の関係にある。この人的研究の対象は日本側からみれば、日本に渡来したオランダ人と邦人の蘭学者とに大別できる。この蘭学者が生れて来る初期の事情を考える時、オランダ人に接する機会とオランダ語の修得が先行的条件であったことを先ず念頭に置かねばならぬ。かくみて来る時、この機会に恵まれ、修得を成し得た人は地理的にも階層的にも限られた範囲の人達だった。すなわち長崎の和蘭陀通詞と官憲、それに年一回商館長一行が江戸参府をした際に面会した人々の外は無い、しかしこれとても制限が厳しくゆっくりした機会ではなかった。(5)更に交渉の第一義は貿易にあって、邦人がかの学術を修得するが如きは余技または副職のことであった。兎に角一番便を有したのは和蘭陀通詞であって、先ず彼らのうちからかの学術並びに技術を兼修する人が輩出した。オランダ語の修得は通訳官という職業柄必要事であり、その他実益のある蘭方医術の修得と天文学上の知識の吸収とであって和蘭陀通詞が初期蘭学の荷担者であった点に大きな意義を持たせたい。このような副業的余技的な和蘭陀通詞の兼修の域を脱して、専門の学者

Hosei University Repository

によって専門の学問が研究されるという本格純正な学問研究が発生したのは江戸において専門の医学者の手によって専門の医学書の研究すなわち解体新書の飜訳事業が開かれてからである。この飜訳事業の社中から師弟相承けて、専門の蘭学者が成長して行ったのであり、更には京坂地方を初め全国に普及していく緒ともなったのである。これはまた逆に長崎における和蘭陀通詞達にも陰に陽に刺戟するところがあり、学問の成長を促進させた。

以上の観点から本論では蘭学塾の塾生を、門人帳を本にしてその変遷を辿ってみたい。更にこれが蘭学発達史の一面を捉えることができれば、と試みるものである。

二　蘭学塾生徒の地域的分布と出身階層

蘭学が何等かの体系を持つ学問として積極性を帯びて来るのは八代将軍吉宗の実学奨励の線に沿ってである。この時にいたり、青木昆陽・野呂元丈等幕府の学者は和蘭陀学術の研究に手を染めた。その成果は、数年間の日時をかけてようやく若干の名詞とかの二十五字を書き習ったという程度でまだ幼稚の域を脱しなかったが、それが師弟相承けて、やがて解体新書の訳述に成功した蘭学専門家のグループに成長していった。名称もこの頃から一般に「蘭学」と呼ばれ始めるようになった、玄白は蘭学事始の中で、この訳述のグループを「社中」とか「同盟の人々」と呼び、個人的な「わが門」とか「青木先生門」「小石元俊塾」といういい方と区別している。「門」「塾」といえば一人の師について学問の伝授を受けることを指し、「社」といえば同好者・同学者の集(6)り、すなわち今日いう研究会・学会のような性格を持たせて使用している。実際、社中において前野良沢は「康熙字典などの如きウヲールデンブックを解せんといふことに深く意を用ひ」、中川淳庵は「本草物産の学を好み」、福知山侯は「専ら地理学を好み給ひ」、山村才助は「地理学をこのみ」、稲村三伯は「釈辞の書企て」、齢まだ若い桂川甫周は「これといふ目当とては見えねども、ただ何とはなくこのことをこのみ」会毎に出席していたという具合にまことに社中は多彩であった。(7)しからば「盟主良沢」はさしずめ会長にでも当ててみたくなる。兎に角立派な蘭学攻究の会であった。この社中で成長した人々が京坂に蘭学の種を播くことにもなり、同時に私塾を開いて自然隆盛をみるようになったわけである。蘭学塾はまことに数多く、時代の経過と共に子塾孫塾に増加し、各地に拡まった。大槻玄沢の芝蘭堂を始め、宇田川一家の門流、青地林宗の塾、伊東玄朴の象先堂、坪井信道の日習堂、京都には小石元俊の塾、新宮涼庭の順正書院、小林桃塢の塾、大坂には橋本宗吉の絲漢堂、緒方洪庵の適々斎塾等々枚挙に暇がない。特に幕末になればその数もぐっと増加して、海防問題のやかましくなるにつれ西洋砲術を教授する塾などでは塾生徒の数は他に比較にならない程の盛況をみた。このことはようやく幕府並びに諸藩から蘭学の需要が高くなってきたことを示すものであると同時に、このような塾生徒の数的質的変遷は蘭学需要の変遷を見る資料ともなり得よう。「徳川時代の後半（中略）江戸には多くの蘭学塾が開かれてゐた。安政四年にはその数五十八を数へた」(8)といわれており、また時代は少し遡るが嘉永元年十一月十

Hosei University Repository

五日佐久間象山は竹村金吾に贈った書簡[9]の中で、ゾーフハルマの写本の誤謬が多く高価であることをのべ、これを安く出版することを計画し、その値段も「金壱枚位と申時には天下の洋学者挙て競ひ求可申候へば三百部五百部はけ候はん事は暫時の間なるべく被存候畢」と需要の大なる見込をたてている。この外京坂の蘭学塾を寄せたらもっと数も増すことになるし、それら諸塾に学ぶ塾生も想像以上に多かったであろう。またオランダ語の学習・蘭書の利用も活発化してきたことが想像できる。

そこで現在まで知り得た門人録を中心に蘭学塾生の地域的分布と出身階層の変遷を窺うことにする。門人録はまた門人帳・門人姓名録・塾姓名録・及門録・門人登籍簿・弟子籍等とも呼ばれており、姓名・入門・入塾年月日・出身地・請人・年齢等の記載があり、自署血判しているのが正規である。

1　芝蘭堂（大槻玄沢の塾）

玄沢は玄白・良沢従学後長崎遊学を終えて江戸に帰った天明六年開塾、文政十年七十歳で歿するまで度重なる火災のため、京橋一丁目から本材木町・三十間堀四丁目・京橋水谷町・木挽町・采女原・築地と居を変えた。[10]「大槻家門人録」[11]には寛政元年七月二十七日から文政九年十一月二十二日に至る間九四名を数える。しかしこれは芝蘭堂に学んだ門人の全部ではない。磐水は律義の性質であったから一度他の門に入った人は前師に憚って門人名簿には署名させなかったためである。[12]とまれここにみえる九四人の出身地域の別と階層をみることにする。地域別分布は別表の通りである。[13]これによってこれをみるに、陸前の十人は磐水の郷里であることから当然多いとして越後の八人をはじめ奥州北陸からの入門者は多く、全て三九ケ国から参集し、その名声が聞えていたことを知る。出身階層については、当然個々の門人の伝記を調査せねば判然としないのであって、そのための調査は遺憾ながらまだ手薄である。ただ門人録とか蘭学に関係ある施設機関を通じて、そこにみえる門人名その他関係の人名をカードにとって準備を進めているが、このカードが約六千枚[14]も手許にある現在とても性急に知り尽すわけにはいかない。であるから芝蘭堂の門人の出身階層を的確にいうことは出来ないが、ここでは一つの試みとして門人録に記載する地名、肩書の書方から判断して概略考察する。なお、かって、原平三氏は象先堂門人姓名録を例にとって、姓名の読み方から推定して、医者は当時通称名を音読、純武士は訓読した事実によるとされて調査されたのであるが、[15]実際に門人録に当ってみると、この基準の適用は頗る困難曖昧なものが多いのである[16]さて前記の視覚から出身地名の書方に例えば「備後守内」とか「何某家来」「何某家中」「何々藩」とあるのはその記載通り藩士か藩医である。その反対に「何々村」と出身地の村名に至るまで記載してあるのは篤志ある村医か庶士あたりと見受けられる。その他単に出身国名のみ記載されている場合が一番手掛りが薄く困難なことであるが、しかし例えば「水戸松延玄之」とあれば後に水戸藩侍医として名のみえる人であり、「丹後田辺」「二本松」「伊予宇和島」「一関」「常州笠間」等々といえば、大抵先ず該当の藩を念頭において記載しているのではある。いま右の視角から芝蘭堂門人録をみると

Hosei University Repository

藩籍ある者　二四名
藩籍あると思われる者　三九名
庶士・村医　一七名

という数字をあげることができる。このうち医者の多いことが察知されるが数字で表示するほど判然とはいたしがたい。

2　小森玄良の塾

小森玄良名を吉啓・義啓・桃塢と号し、美濃の人。[17] 江馬春齢に師事し、京師に入りては海上随鷗に入門した。[18] 文化六年同門の藤林普山と同時に開業した。[19] 場所は京都東洞院蛸薬師南といい、今、彼の門人帳が現存する。[20] 表題は記されておらず直に入門年月日住所氏名が書きはじめられており、享和二年五月より万延元年五月まで五九年間三六九名の門人名がみえる。[21] 入門生の出身地は別表の通りであるが、概して京都を中心とする隣国に集中していることが特徴である。またこの出身階層については、この門人帳の記載から直ちに判断することは不可能であるが、他の門人録に比較して何々藩とか何々家中とかという記載がきわめて少なく、それに比べて郡・村名まで記している例が比較的多いことからして、京都を中心とする近国範囲内の町村医達が多いように見受けられる。というのは、名の通った人をこの門人帳から見出すことが困難な内容からして、この程度の推測以上に出ることは冒険である。ただ一人文化十二年四月に入門した越前の池田冬蔵義之は「解臓図賦」の著があることで知られているのみである。[22] この他越前府中藩七人、福井藩二人、丹後宮津藩三人、丹波田辺藩四人、近江膳所藩五人、加賀金沢藩十人等の士分を見い出せることは多少注目すべきである。

3、迎翠堂（土生玄碩の塾）

土生玄碩名は義寿、初め玄道後に玄碩と改称、字は九如、桑翁と号す。本姓渡辺氏、安芸国高田郡吉田に代々眼科医の子として生る。広島藩浅野侯の侯医、文化七年幕府侍医俸百俵五人扶持、後法眼に叙せらる。かのシーボルトが文政九年江戸参府をした日記の四月二十五日の条に「将軍家侍医諸氏の訪問を受く、其中に眼科医あり」[23] とあり、この眼科医は玄碩その人である。彼は眼科手術用の瞳孔散大薬の薬方伝授を懇請してシーボルトに葵の紋服を送ったことが露顕して罪を得、永蟄居の身となったが、嘉永元年八十七歳の生涯を終るまで門人の療治・手術の指導に当った。

「迎翠堂門人録」[24] には二〇一名の門人を数える。しかし門人録の形式を整えてはおらなく、出身地は割註で各氏名の下に記入されておって入門年月日に至っては全々記されていない。かつ四段に整理されてしまっている。だから氏名ときわめて簡略な出身地しかわからない。呉秀三博士の「土生玄碩先生伝」[25] によって門人録を検討してみるに文政五年玄碩四十七歳の時芸州浅野重晟の第六女南部利敬侯夫人教姫の眼病を療治すべく江戸藩邸に入ったが、その時第一に彼の門に入ったのが当時江戸古方家の領袖たる岑少翁の門人高野敬仲で次が杉田玄白の嗣子杉田立卿であった。[26] この二人は門人録において三番目と四番目とにその名がみえる。またそれ以前の二名についても出身地が武州と常州であることからして土生玄碩の迎翠堂門人録は文政五年玄碩四十七歳で江戸に出た頃から始まったものとみることができる。下限は玄碩が文政

Hosei University Repository

十一年シーボルト事件の際揚屋入りとなった時までであるか、歿年の嘉永元年までか、それとも子玄昌の門人も入っているかはわからない。出身地域は三十数ケ国に亘り、医者が多い。

4　蘭馨堂（吉田長淑の塾）

吉田長淑、名は成徳、字は直心、駒谷また蘭馨堂と号す。長淑は其の通称、彼の蘭学は桂川甫周に従学し、「江戸波留麻」十巻を謄写すること前後三回、宇田川槐園の「内科選要」を読んで感を興し、江戸中橋上槇坊に和蘭内科を以て開業した。文化六年宇田川榛斎の斡旋によって藤井方亭と共に加賀金沢藩に俸二十口を以て聘せられた。訳述に意を用い、ヨハンヒュクサムの「泰西熱病論」七巻、同後篇五巻をはじめ、蘭馨堂方函抄・内科解環十五巻、蘭訳鏡原五十巻等がある。文政七年八月十日四十六歳で病歿。彼の門人は文政四年の「門人譜」と「門人籍」の二種によって知り得る。前者は医学博士岡崎桂一郎著「吉田長淑先生小伝」の巻首に写真版を以て示され、後者は同書の巻末に収められている。この門人録は他のものと異り入門年月日が記入されておらず単に入門順に自署していったもので十九人の名がみえる。因に門人譜に「仙台水沢（破門）高野郷斎」とあるはかの高野長英のことである。「門人籍」に署名せる門人は全て一三二名、中でも足立長雋（箕山侍医）・小関三英・湊長安（箕山侯医）・桂川甫賢・衣関順庵・程田玄悦（沼津侍医）・松岡道遠（長府侍医）・畑中文仲（松山侯臣）などは名が聞えている。やはり文政年間あたりのものと思われる。ただこの「門入籍」には身分肩書がよく書かれているので出身階層の比率をみる上に興味深い。次に示す。

医士	三名	伊賀組　一名
藩士（侍医を多く含む）	六〇名	売薬房　一名
処士	三八名	御坊主　一名
村医	六名	無記入　一八名
与力	三名	
御徒	一名	計　一三二名

地域的には藩籍のある者のみをとってみてもほぼ四十藩に亘る

5　シーボルトの鳴滝学舎

シーボルトが日本に滞在したのは文政六～十一年と安政六～文久二年の二回であった。この間彼に直接間接に教えを受けた日本人は非常に数多い。特に長崎の鳴滝に建てた家屋においては診療及び門下生養成の場として、その成果に大なるものがあった。呉秀三博士は大著「シーボルト先生其生涯及功業」の中でシーボルトの門下として直接教えを受けし人々として五七人、面会又は交際せし人々として二五人、長崎の町年寄及び通詞十四人、諸侯六人、再渡米の時面会して益を求めし人々として十三人計一〇五人をあげておられる。いずれも後に蘭学者の中心的人物に成長した人々である。門人帳ではないが特に茲に一項を設けた。各人の伝は省いて、ここでは塾を開いた人々を列挙してみよう。吉雄幸載（長崎）・猶林宗建（大成館長崎）・湊長安（丹精堂江戸）・岡研介（万松精舎大坂）・山口行斎（長門馬関）・高野長英（大観堂江戸）・日高凉台（大坂）・伊東玄朴（象先堂江戸）・青木周弼（長州萩）・幡崎鼎（大坂）・本間玄調（水戸）・武谷元立（筑前）・百武万里（博多）・大塚同庵（江戸）・土生玄碩（迎翠堂江戸）・小森玄良（京都）・新宮凉庭（京都）・箕作阮甫（江戸）・大槻玄沢（芝蘭堂江戸）

Hosei University Repository

・福地源一郎（共貫義塾）・吉雄権之助（長崎）・高島四郎大夫（長崎江戸）・松本順（蘭疇舎江戸）

6　象先堂（伊東玄朴の塾）

江戸蘭方三大家の一人に数えられる玄朴の塾は象先堂といい、その「門人姓名録」は伊東玄朴伝[27]の巻末に収められておる。門人数四〇六人。このうち初めの一一二人の入門年月日は記入されておらなくて不明、但し前書育英の項に「玄朴の象先堂塾を興せる時年三十四」とあるから年譜と照合して天保四年に当る。場所は下谷御徒町和泉橋通。門人録もこの頃から始まったものと推定できる。入門年月日の判然とするのは弘化二年からで、下限は明治三年八月迄、その間三八年。集った塾生は医家の出身もかなり多いのであるが、しかし玄朴「江戸に在り医学漸く盛なるや舶載の蘭書は悉く是を購ひ其価の貴きを問はず、医学書・理学書・兵書を始めとし文学・歴史・地理・法律の書に及び珍蔵する処其数を知らず、蘭学を学ぶ者単に玄朴の蔵書を見んとして其の門に入る者あるに到る」[28]という具合であったから医家以外の出身者も多数含まれていたことが窺える。かって原平三氏は「象先堂入門者総数三五六名のうち武士階級一七九名でその内訳は幕吏二名藩士一三八名（六〇藩）準藩士十二名（其他武家階級と推定され得る者）二七名であってその過半数が武家階級に依って占められて居る」[29]といっておられるが、この調査の手順は説明されておらないし、入門者総数三五六名というのはどういうのであろうか、門人録には上述の通り四〇六名である。氏の推定の根拠は前述の通り医者は当時通称を音読、純武士は訓読した事実によるとされたのであるが、総人数の疑問とともに、この基準の適用は頗る困難曖昧なものが多い。これは個々の伝記的調査を全門人にわたってせぬ限り正確な数字をあげることはできない。塾生の出身地域については一覧表にしておいた。肥前は玄朴の出身地であり、武蔵は江戸に塾があったことから当然多く、羽前・陸前・陸中・下総・越後・長門・伊予・等は多く、全て五十九ケ国に亘る。

7　適々斎塾（緒方洪庵の塾）

緒方洪庵、名は章、字は公裁、適々斎また華陰と号し、初め三平後に洪庵と称した。彼は海上随鷗門下の中環に蘭方医学を学び、天保二年坪井信道の日習堂に入門、宇田川榛斎の門にも出入が許され、また長崎に遊学して天保七年蘭医ニーマンに師事した。かくて天保九年二十九歳の時大坂瓦町に開業し、この時から適塾も始まった。現存の「適々斎塾姓名録」は過書町移転[30]の翌年すなわち天保十五年正月から始まっており六三六名を教える。しかしその内終りの二五名は文久二年八月以降洪庵が江戸に住むようになってからの日附で署名され、更にその内後の十九名は文久三年六月十日洪庵江戸に没して後の者である。嗣子洪哉（後の惟準）のもとに入門した人たちと思う。

適塾の塾生と蘭学々習の実際はどうか。「緒方洪庵伝」「適塾の人々」はこの点よく説明しているが、やはり当時在塾した福沢諭吉や長与専斎の言葉は塾風を鮮明に物語っている。

適塾の塾風は極めて自由奔放で、福翁自伝によれば、塾生の多くは士族でありながら、刀は質に入れてしまい「塾生の誰か所持して居る其刀が恰も共有物」となっている始末で「塾風は不規則と云はんか不整頓と云はんか乱暴狼藉、丸で物事に無頓着」である

Hosei University Repository

から世間でも緒方の書生といえば一目置いた観があった。がしかし「学問勉強と云ふことになっては、当時世の中に緒方塾生の右に出る者はなからうと思はれる」のであって、その勉強振りたるや一例を挙げれば塾中枕というものがどんなに捜してもない「というのは時は何時でも構はぬ、殆んど昼夜の区別はない、日が暮れたからと云て寝やうとも思はず頻りに書を読んで居る。読書に草臥れ眠くなって来れば、机の上に突臥して眠るか或は床の間の床側（とこわき）を枕にして眠るか、遂ぞ本当に蒲団を敷いて夜具を掛けて枕をして寝るなどと云ふことは只の一度もしたことがない。」といった具合である。修業の仕方は入門初学者には「先づ其ガランマチカを教へ、素読を授ける傍に講釈をもして聞かせる。之を一冊読了ると、セインタキスを又其通りにして教へる。如何やら斯うやら二冊の文典が解せる様になった所で会読をさせる」この会読は会頭が原書を持っていて各人に割当を課して採点し、解し得た者は白玉、解し傷うた者は黒玉をつけられ、一ケ月間の点数を調べて毎月の席順を変え、三ケ月続けて上席を占めれば上級へ進むことが出来るのである。文典以上の生徒は塾の蔵書である物理書と医書取集めて僅か十部に足らない舶来の原書を写本して、片端より皆字引にて引出すことになるが、[31]「肝腎の字書といへるは塾中只ゾーフの写本一部あるのみ。三畳敷許りの室をゾーフ部屋と唱へて其処に備へ置き（中略）百余人の生徒皆此一部のゾーフを杖とも柱とも頼むものなれば（中略）ゾーフ部屋に徹宵の燈火を見ざる夜ぞなかりし」という具合であるからして「其頃塾中の雑談に、字書を坐右に控え原本にて書を読むことを得ば天下の愉快ならん」といい合ったのであった。[32]

では適塾に学んだ塾生はどんな目的のもとに研鑽を続けたのであろうか。福翁自伝は「若しも真実その苦学の目的如何なんと問ふ者あるも、返答唯漠然たる議論ばかり。医師の塾であるから政治談は余り流行せず、国の開鎖論を云へば固より開国なれども、甚だしく之を争ふ者もなく、唯当の敵は漢方医であった（中略）兎に角に当時緒方の書生は十中の七八、目的なしに苦学した者であるが、其目的のなかったのが却て仕合」であったといっているが、松香私志はまた「元来適塾は医家の塾とはいへ、其実蘭書解読の研究所にて、諸生には医師に限らず、兵学家もあり、砲術家もあり、本草家も舎密家も凡そ当時蘭学を志す程の人は皆此塾に入りて其支度をなす」のであって正に「当時全国第一の蘭学塾」であった。また一面からいえば彼らの多くが士分の出身であって、そのバック――具体的には藩からの遊学――によって後顧の憂いなく研学に専念することができたのであった。このような階層の塾生を擁しているが故に緒方洪庵をして「当時は病用相省き、専ら書生教導いたし、当今必要の西洋学者を育て候つもりに覚悟し、先づ是を任といたし居申候」[33]と決意せしめているのである。だから塾生の意識が一面如何に自由奔放であっても、根本においてはやはり幕府の施政の線に参与隷属することになり、このことは塾生中の多くの俊秀が学成るに及んで、その所属の藩に帰って登用され、あるいはまた幕府に、諸藩に仕官を望み、登用された者の多いことをみてもうなずける。洪庵自身も結局においては幕府の西洋医学所に出仕するに至っておる。以上の適塾の事情

Hosei University Repository

は伊東玄朴の象先堂でも大同小異のことであろうし、これ以後の蘭学塾では益々この色彩は強くなっていくのである。

塾生の出身地域については別表参照。

8 佐久間象山の塾

佐久間象山の門人は和漢洋三学前後通じて凡一万五千余人[34]ともいわれるが、これは単に象山の門弟が多かったという程の意味である。増訂象山全集第五巻所収の「及門録」には嘉永二年から安政元年にかけての砲術関係の門人四五二名をみる。彼の砲術は天保十三年九月江川太郎左衛門に入門し、下曽根金三郎・村上貞平等と交わるようになってから本格的に研究が進められ、一方同年十月藩主真田幸貫が幕府の海防掛の任に就き象山を顧問としたことから天下に繋わりある実用の学ともなった。殊に兵学に深い関心を持つようになったのは一八四二年天保十三阿片戦争で中国が英国の火炮の前に無惨な姿を露呈した事態に対し、多大の衝撃を受けたからである。であるが故に彼の蘭学は語学・医学に関する研鑽よりも、兵学や世界の地理情勢探知におけるそれの方がはるかに重きがあり、これに関連する基礎的な理科学にも手を染めている。彼の兵学の内容は用兵戦術・戦史と砲術・火砲鋳造に大別でき、なかでも砲術・火砲鋳造は彼の本領である。[35]この分野はこの期の各藩の要求するところでもあったことは門人帳が雄弁に物語っている。すなわち松代藩は当然として、中津・大野・佐倉藩等はいずれも多くの藩士を送り、その他各藩から入門している。門人名四五二名のほとんど全部が武士階層である。

9 静修堂（川本幸民の塾）

川本幸民は足立長雋・坪井信道の門に蘭学を学び「気海観瀾」の著者青地林宗の第三女秀子と結婚し「気海観瀾広義」を著し、化学の分野に意を用いること重く、後洋書調所教授職に挙げられ、所内に精煉場化学局を新設する等その功大なるものあり。晩年職を辞して三田にかえり、金心寺に寓し嗣子清一と共に蘭学の塾を開いて藩の子弟を教導した。これより先安政四年彼が江戸木挽町に居住した時の書屋を静修堂といったが、この時以前の門人一九五名、木挽町時代の来学者二四名、摂州三田にて開塾した時の来学者一二七名を数え、その姓名を知り得る。[36]高松譲庵・桑田立斎・箕作省吾・松木弘安・橋本左内・飯沼竜夫・市川斎宮・佐波銀次郎・広瀬元恭・東条英庵等の顔もみえ、藩籍のある者は大野藩の十二人を筆頭に越前・大垣・筑前・長州・阿州の各藩がそれに続き、全て三十二藩九〇人が判然としており、藩籍ある者と相像される者も二十数名を数える。以て各藩のようやく基礎科学にも意を払うことに積極的になったことを窺うことができる。

10 鳩居堂（大村益次郎の塾）

大村益次郎は近代兵制改革者としてその名は普く知られている。彼の学問は天保十三年十九歳で長州三田尻の蘭方医梅田幽斎に、翌年は豊後日出の大儒広瀬淡窓の学塾咸宜園に学び、弘化三年二十三歳の春大坂の適塾に入門、蘭学及び医術を学んだ。また長崎の蘭方医奥山静叔にも学んだ。一時郷里大村に医業を開いたが業の不振で三年にして閉じた。ついで嘉永六年三十歳の年宇和島藩主伊達遠江守宗城に招聘された。時代の要求もあり進取的な宇和島藩に於いて彼の蘭学は活用されたのである。すなわち翌安

Hosei University Repository

政元年二月には西洋兵学の飜訳・蘭学の教授となり「海綿略記」「舶工須知」を訳し八月には軍艦の製造乗前等修業のため長崎表に赴き、翌二年には軍艦雛形を造った。安政三年には藩主の参勤出府に随い江戸へ上り、一時下谷練塀小路外科医大槻俊斎に寄寓していたが、十一月朔日江戸麹町一番町に私塾鳩居堂を開き、主として蘭学及び医術を教授した。[37] 鳩居堂塾の門人帳は表紙に「弟子籍」と隷書で記され、初めに「安政三年歳在丙辰十有一月朔創業」とあり、慶応二年まで一六〇人を数える。医学専修者と兵学攻究の者とが居たが、読書力養成のため色々と変った書籍を読ませて知識を拡めさせ、なるべく新しい舶来本を取寄せて読ませていた。[38] 門人中宇和島藩、長州藩が最も多く、一六〇名中藩籍明記の者一二〇名の多きに達し、全て五三藩に亘る。大村の名声と共に、如何に各藩が当時兵学の急務を痛感していたかが窺える。

11　松本良順塾の塾

蘭疇松本良順は伊東玄朴・竹内玄洞・林洞海の諸門を訪ね蘭学の疑義を質することもあったが本格的には嘉永四年二十歳で深川の坪井信道の日習堂へ通学するようになってからである。その後安政四年二十六歳の春二月幕命に依り長崎に至りポンペに就学専ら蘭方医を習った。しかしこの千里渡航して来朝した泰西文明をただ独りで学ぶことの不経済・国家的損失を痛感し、諸種の困難をおかして「順ノ助手ト名ケ陪席」[39]する形式で「長崎に派出シアル諸侯ノ家臣・在国医家ノ子弟ヲ集メ（中略）藤堂の家臣蘇摩鍋島越前筑前等ヲ誘導（中略）在塾ノ人士七十有余人ナリ」[40]と、かくて松本塾は事実上蘭医ポンペ直伝の塾の観を呈した。この塾の門人帳が「登籍人名小記」[41]である。安政四年一八五七開講時より後精得館に改組された時代に至るまでの門人名が記してあるが、ポンペの帰国した一八六二・一〇・一五（文久二年八月二十三日）を下限としてポンペの指導を得たと推定される人名は一三四名、いずれも各藩から送られた藩士が多く、この中の一人入沢恭平が越後新発田から長崎へ旅した日記があるが、[42] その中で彼が万延元年一八六〇四月二〇日ポンペに従学した時、先学の門人として二七名をあげているが多少前記「登籍人名小記」の遺漏を補え得る。中でも佐渡新町出身の司馬湧海は語学の天才で、松本門下第一と云われ、蘭・英・独・仏・支の五ケ国語に堪能であり、露・ラテン・ギリシア語にも多少の教養があったといわれる程の偉才の主であった。[43]

12　順天堂塾（佐藤泰然の塾）

佐藤泰然は江戸に生れ、長じて吉田長淑門下の蘭方医足立立長雋に就き、のち高野長英にも教えをうけ、天保五年長崎に赴き蘭人ニーマンに就いて学んだ。滞在四年の後江戸に帰り、和田泰然[44]と称して両国薬研堀に開業した。この時の門人のうち林洞海・岡南洋・三宅艮斎等は錚々たるものであった。泰然は長女を洞海に配して家を譲り、自身は天保十四年佐倉に移住した。[45] ここで本姓に復し佐藤泰然を名乗って、病院を立て順天堂と名づけた。我邦私立病院の初めである。また順天堂塾を建て門弟の教育に当った。門人帳は今日残っていないが、ただ慶応二年の門人名簿[46]のみは知り得る。塾監には岡本道庵・西友甫、第一級に中村斎・木原逸斎、以下二級六名三級十五名第四級七名無級四名訳々生一名合計三七名である。ここに分けた等級は原書の読解力と治療の工拙

Hosei University Repository

により区分したものであってその学風をよく示している。因に塾監中岡本道庵は後に佐藤舜海と称し佐倉順天堂を継いだ人、第二級には高知介石すなわち舜海の養子となりその後を継いだ後の男爵佐藤進がいる。この外著名なものとしては先の林洞海・三宅艮斎・松本順・佐藤尚中・司馬凌海等をあげることができる。[47]

以上門人録のある十二ケ塾について門人録を年代順にみてきた。この外門人帳の形態をなしてはいないが、蘭学者の伝記中で門人に言及しているものについて以下若干の考察を試みる。

13 青木周弼の門人

長州藩医青木周弼の門人は萩の家塾で教えた者と医学館で教えた者を合せば数百人に達するといわれているが、門人録のない今日門弟の全部を知ることはできない。しかし伝記「青木周弼」[48]の門人の項には毛利公爵家所蔵等の記録から八三名をあげている。「青木周弼年譜」[49]その他から推して天保の初め頃から嘉永頃までの門人と思われる。三都崎陽の如き要地ならば兎も角、萩の如き交通不便の辺境に、各地からこれ程の勉学者を引付け得たことは驚異というべく、十分の者も多いが、やはり地域柄町医者村医の名が多くみられる。その主なる者は弟の青木研蔵をはじめ徳山藩侍医池田耕亭、蕃書調所教授手伝東条英庵、大坂の名医中天游の子中耕介、津和野藩醫養吉館蘭学教授吉木蘭斎、緒方洪庵夫人の弟億川虎之助（後の信哉）萩好生堂の舎長日野宗春、熊本藩侍医後大坂の医学校及び病院の院長高橋春圃等々である。

14 箕作阮甫の門人

呉秀三博士の「箕作阮甫」二八五頁門人の項に一七名をあげている。「先ず第一に佐々木省吾が（中略）鍛冶橋の邸に来て、阮甫の門に入り」といわれているから天保五年阮甫三六の時火難に遇い二度目に津山藩鍛冶橋邸に移って以後のことであろう。次が箕作秋坪で、入門したのは十九歳の時とあるから天保十三年阮甫四十四歳の時に当る。因にこの年十一月十一日佐々木省吾を引取って箕作氏を称えさせた。[50]

15 高島秋帆の門人

高島秋帆（後に喜平）は長崎町年寄の家に生れ、特に父四郎兵衛が外国軍艦を相手とする台場の受持であって、その砲術を教授する師範役として、早く西洋砲術に意を用いていたから、秋帆も父の職を襲いでから益々この方面に研鑽するところがあり、オランダ語を話すことはできなかったが、天保年間においてその規模最大といわれる程の蘭書を蒐集した。彼の旧蔵書で現存のものはわずか二冊しかないが、天保十三年十月二日彼が長崎で逮捕された際所蔵していた蘭書は全部押収され。今は「押収蘭書目録」としてその内容を知ることができる。すなわち三兵戦術・築城工兵・砲術・馬術・火工品・歩騎砲操典・重量物運搬・鋳造冶金・管理・射撃学・語学・自然科学・医書等である。[51]このような文献による研究だけでなく火器の輸入には手を尽し、このことは多数の注文書によって知ることができる。[52]

さて高島秋帆といえば「享保以来一百五十年洋学者流の其間に輩出する茂材名匠固より数ふるに遑あらず然共其卒先殊業を立て実利を内外に施したる者蓋三人曰く大槻磐水曰く伊能東河曰く高島秋帆」[53]と新撰洋学年表中に大書され「高島秋帆の銃隊訓練を創

Hosei University Repository

めしぞ今日全国皆兵の基本なる火技中興洋兵開祖」[53]といわれている。彼の砲術は世に高島流といわれ西洋流砲術の代名詞ともなっている。特に幕府が海岸防禦に西洋流砲術を採用しその普及及び徹底を期するため、嘉永六年九月二十一日付で、西洋砲術を四芸（弓馬鉄剣）同様に修業すべきことを令達[54]してからは全国各藩から彼の門に藩士が送られてその実技を身につけることとなった。もっともこれより先天保十二年秋帆は幕命により長崎から出府し五月九日徳丸原で演習を行い頗る順調裡に終った。その結果幕府より褒賞を受けると共に火術伝来の秘事を直参の者一人を限って伝授すべきことの命を受け、幕臣下曽根金三郎に伝授した。ついで再度の指令によって御代官江川太郎左衛門へ伝授し、結局下曽根江川の二人に免許を与えた。なお幕府はこの火術の諸藩への相伝を制限したが、すでに西国諸藩へ伝えた後であり、その後天保十三年六月に至ってこの制限は撤去された。ここにおいて高島流西洋砲術が天下に盛行することとなり、「江戸では佐久間象山・川路聖謨・大槻磐水等を初め門人四千余人に上るに至った」[55]ということである。初期の門人として池部啓太（肥後藩）・鍋島十左衛門茂義（佐賀藩）・鳥居平七（後の成田正右衛門・薩摩藩）・村上範致（田原藩）・市川熊男（田口加賀守の臣）・有坂淳蔵父子（岩国藩）等[56]はその主たる者である。今後は各藩から秋帆のもとに送られた藩士を探索せねばならない。そして前述の如く嘉永六年幕府が西洋砲術修得を命じて以後は芝新銭座の江川塾（練武館）及び芝赤羽根橋々畔の下曽根金三郎の塾は共に修業者が堂に溢れる程の盛況を呈した。秋帆自身は前者の塾頭として後進の指導に当った。

16　江川坦庵の門人

坦庵江川太郎左衛門は高島秋帆に就いて伝授を受け、高島流西洋砲術を世に拡めた。

また伊豆韮山の反射炉の経営で著名であるが、多数の門人を提撕したのは江戸の芝新銭座においてである。江川塾の門人帳について横山健堂氏は「人物研究と史論」の中で「江川氏に存する門人帳に『砲術門人姓名帳』『皆伝以上之者姓名帳』の二冊がある。それに依れば、最初の入門者は、天保十三寅七月二日、下田の浦役人二名にして、其次は象山である。而して象山は免許の門人である。『砲術門人姓名帳』（天保十三寅七月より安政三辰年十二月改）に

天保十三年九月七日門人　真田信濃守家来[57]

同　十四年二月六日　免許　佐久間修理[58]

と紹介しておられるが、坦庵全集はじめ数種の伝記のいずれにも載っていない。未刊の資料の多くを蔵している文部省の史料館を調査したが「砲術御門人束修請払帳、天保十四卯年分」を発見して若干の門人名を知り得たのみで前記二種の門人帳の行方を知ることはできなかった。博雅の御示教を賜りたい。であるからここでは「江川太郎左衛門英竜行状書」[59]によって彼の門人について窺うことにする。行状書によれば「受業ノ弟子四千余人有之川路聖謨佐久間象山大槻磐溪等ハ最早ク入門致シ候」[59]とあり、頭註に「川路左衛門ノ尉ハ一番ニ入門致候」[59]とある。また矢田七太郎氏著「幕末之偉人江川坦庵」の年譜には「列藩諸士負笈（中略）漸次百三十余藩に及ぶ」とあり、雑誌武士時代第一巻第一号には

Hosei University Repository

「江川太郎左衛門及門諸士の藩籍」として一二二藩を掲げている。

三　結　語

以上現在知り得る門人録を年代順に挙げて門人の地域的分布と出身階層について若干の整理と考察を加えてきた。その結果

一、地域的には、蘭学塾の所在と塾師の専攻によって多少の差異はあるが、蘭学に理解のあった藩の存在する国には門人も多く、幕末に至ればほぼ全国に亘る。

二、階層的には幕末に至り海防問題が喧しくなって来るにつれ各藩から藩士が送られ、医学を学ぶ者よりも西洋兵学砲術を修得する者の方が断然その数を増した。このことはその主たる内容が医学中心の蘭学から兵学中心の蘭学に移り変ったことを意味し、人的にも蘭方医家による蘭学を武士の手によってなされる蘭学が数的に上廻っていったことを意味する。

蘭学塾生徒の地域的分布表

1960.1.15.作成

国名＼塾名	芝蘭堂	小森塾	象先堂	適塾	国名＼塾名	芝蘭堂	小森塾	象先堂	適塾
山城	2	61	1	9	肥後			3	9
大和	1	2	2	6	日向				6
河内		2	1	2	大隅				1
和泉		3		5	薩摩		2	4	6
摂津	1	10	3	17	若狭		5	1	
近江	2	16	3	3	越前	1	19	9	25
伊賀		2		1	加賀	1	11	2	28
伊勢		10	6	3	能登	1	7		1
志摩				1	越中	1	9		3
紀伊	1	4	12	12	越後	8	6	11	7
淡路				2	佐渡		2	7	2
丹波	1	10	2	3	美濃		10	7	12
丹後	1	7	8	17	飛騨		1		1
但馬		3		5	尾張		4	5	3
播磨	1	12	1	15	三河		5	7	5
備前	2	3	7	19	信濃	1	3	5	2
美作		1	3	3	甲斐			2	3
備中	1	1	6	23	遠江			2	5
因幡	3		1	7	駿河	2	1	7	7
伯耆		6		2	伊豆			3	1
隠岐		1		1	相模			6	1
出雲	1	20	1	6	武蔵	5	3	34	20
石見		4	2	7	安房			2	
備後		1	1	11	上総			3	2
安芸	4	8	5	20	下総	2		12	6
周防		4	6	31	上野	1	3	4	2
長門	4		14	24	下野	1		6	1
阿波	3	5	7	9	常陸	7	1	6	4
讃岐		5	9	14	磐城	4			
伊予	3	10	15	22	岩代	1	1	3	3
土佐	1	5		13	陸前	10	1	12	1
豊後	1	11	5	10	陸中	2		14	4
豊前	1	1	2	11	羽前	4		21	8
筑前	1	3	2	12	羽後	1	9	4	2
筑後		1	5	19	陸奥	2		6	
肥前		6	53	35	松前			4	2
壱岐					不明	3	1	10	10
対馬			1	1	合計	94	342	406	612

Hosei University Repository

三、門人の氏名を逐一掲げはしなかったが、蘭学に手を染めた人々は、その基礎学力として、すでに相当漢学の素養を修めていたことが、門人録の人的構成面からも頷けるのであって、杉田玄白が言に「漢学にて人の智見開けし後に出でたる」(60)とあるのもあながち初期における事情に限ったことではない。

(1) 杉田玄白著・緒方富雄博士校註、岩波文庫『蘭学事始』昭和三十四年刊。
(2) 『磐水存響』乾所収。
(3) 板沢武雄博士『日本とオランダ』一三六頁。
(4) 池田哲郎氏「仙台藩の蘭学」（歴史、第四輯）にも同様な意見であり、賛成する。
(5) 大槻如電『新撰洋学年表』寛政六年の条。和蘭陀甲必丹の江戸参府の機会に驥善を質すべく客館に訪問するに際し、杉田・前野・大槻・宇田川・森島等は医官桂川甫周の陪席という形式をとり、若年寄から許可を得ている。
(6) 前掲『蘭学事始』
(7) 前掲『蘭学事始』
(8) 花園兼定氏『洋学百花』昭和四年刊）
(9) 『増訂象山全集』巻三、四六一～二頁。
(10) 『磐水年譜』（『磐水存響』所収）
(11) 『大槻家門人録』一巻、（早大図書館所蔵。板沢武雄博士『日蘭文化交渉史の研究』五一四～五二三頁所収）
(12) 『新撰洋学年表』寛政二年条。
(13) 地名の整理には、吉田東伍博士『大日本地名辞書』三冊及び汎論索引を用う。
(14) 拙稿「蘭学者名簿作成について」（『蘭学資料研究会研究報告』第四八号）
拙稿『蒐訳書を持つ蘭学者名簿』上下二冊　蘭学資料研究会『蘭学者名簿稿I』所収。
(15) 原平三氏「蘭学発達史序説」（歴史教育、第十一巻第三号　昭和十一年六月）
(16) 沼田次郎氏も『幕末洋学史』の中で指摘されながら「これでも一通りの趨勢を知る意味では十分であろう。」といっておられる。

(17) 伝記の詳細は、呉秀三博士『シーボルト先生其の生涯及功業』。山本四郎氏「海上随鷗とその一門（一）」（文化史学、第十四号）参照。普山が師随鷗の語学の面を承けたに対して、桃塢は医業の面を発展させ、正六位下縫殿助に任ぜられ、蘭方内科医にして宮中に召された嚆矢である。『蘭方枢機』『病因精義』『泰西方鑑』『病珍要訣』等の訳書がある。
(18) 随鷗の門人は京都大恩寺の霊碑の裏に二二名の姓名が列記されている。又『新撰洋学年表』文政八年条所収。
(19) 『平安人物志』
(20) 山本四郎氏発見。快く貸与下されたことに感謝の意を表す。
(21) 年度別に入門者数を表示し、桃塢の活躍と対照してみれば

年	門人数			
享和二	一	京都に開業	〃	九
〃	一		〃	一〇
文化四	一		〃	一一
〃	一		〃	一〇
〃	一	随鷗没	文政一二	一一
〃	三	普山と刑屍解剖	天保　元	一三
〃	九		〃	二
〃	一〇		〃	三
〃	五		〃	四
〃	一一		〃	五
〃	七		〃	六
〃	一二		〃	七
〃	一三		〃	八
〃	二六		〃	九
〃	一四		〃	一〇
文政　元	三		〃	一一
〃	一七	宮中侍医従六位下肥後介	〃	一二
〃	一七		〃	一三
〃	一〇		〃	一四
〃	一三		〃	一五
〃	一八	縫殿大允	〃	一八
〃	一三		〃	一九
〃	一二		〃	二〇
〃	一一		〃	二一
〃	九		〃	二二
〃	八		〃	二三
〃	八		〃	二四
〃	七		〃	二五
〃	六		〃	二六
〃	五		〃	二七
〃	四		〃	二八
〃	三		〃	二九
〃	二		〃	三〇
〃	一		〃	三一
〃	一		〃	三二
〃	一		〃	三三
〃	一		〃	三四
〃	一		〃	三五
〃	一		〃	三六
〃	一		〃	三七
〃	一		〃	三八
〃	一		〃	三九
〃	一		〃	四〇
〃	一		〃	四一
〃	一		〃	四二
〃	一		〃	四三
〃	一		〃	四四
〃	一		〃	四五
〃	一		〃	四六
〃	一		〃	四七
〃	一		〃	四八
〃	一		〃	四九
〃	一		〃	五〇
〃	一		〃	五一
〃	一		〃	五二
〃	一		〃	五三
〃	一		〃	五四
〃	一		〃	五五
〃	一		〃	五六
〃	一		〃	五七
〃	一		〃	五八
〃	一		〃	五九
〃	一		〃	六〇
〃	一		〃	六一
〃	一		〃	六二
〃	一		〃	六三
〃	一		〃	六四
〃	一		〃	六五
〃	一		〃	六六
〃	一		〃	六七
〃	一		〃	六八
〃	一		〃	六九
〃	一		〃	七〇
〃	一		〃	七一
〃	一		〃	七二
〃	一		〃	七三
〃	一		〃	七四
〃	一		〃	七五
〃	一		〃	七六
〃	一		〃	七七
〃	一		〃	七八
〃	一		〃	七九
〃	一		〃	八〇
〃	一		〃	八一
〃	一		〃	八二
〃	一		〃	八三
〃	一		〃	八四
〃	一		〃	八五
〃	一		〃	八六
〃	一		〃	八七
〃	一		〃	八八
〃	一		〃	八九
〃	一		〃	九〇
〃	一		〃	九一
〃	一		〃	九二
〃	一		〃	九三
〃	一		〃	九四
〃	一		〃	九五
〃	一		〃	九六
〃	一		〃	九七
〃	一		〃	九八
〃	一		〃	九九
〃	一		〃	一〇〇
〃	一		〃	一〇一
〃	一		〃	一〇二
〃	一		〃	一〇三
〃	一		〃	一〇四
〃	一		〃	一〇五
〃	一		〃	一〇六
〃	一		〃	一〇七
〃	一		〃	一〇八
〃	一		〃	一〇九
〃	一		〃	一一〇
〃	一		〃	一一一
〃	一		〃	一一二
〃	一		〃	一一三
〃	一		〃	一一四
〃	一		〃	一一五
〃	一		〃	一一六
〃	一		〃	一一七
〃	一		〃	一一八
〃	一		〃	一一九
〃	一		〃	一二〇
〃	一		〃	一二一
〃	一		〃	一二二
〃	一		〃	一二三
〃	一		〃	一二四
〃	一		〃	一二五
〃	一		〃	一二六
〃	一		〃	一二七
〃	一		〃	一二八
〃	一		〃	一二九
〃	一		〃	一三〇
〃	一		〃	一三一
〃	一		〃	一三二
〃	一		〃	一三三
〃	一		〃	一三四
〃	一		〃	一三五
〃	一		〃	一三六
〃	一		〃	一三七
〃	一		〃	一三八
〃	一		〃	一三九
〃	一		〃	一四〇
〃	一		〃	一四一
〃	一		〃	一四二
〃	一		〃	一四三
〃	一		〃	一四四
〃	一		〃	一四五
〃	一		〃	一四六
〃	一		〃	一四七
〃	一		〃	一四八
〃	一		〃	一四九
〃	一		〃	一五〇
〃	一		〃	一五一
〃	一		〃	一五二
〃	一		〃	一五三
〃	一		〃	一五四
〃	一		〃	一五五
〃	一		〃	一五六
〃	一		〃	一五七
〃	一		〃	一五八
〃	一		〃	一五九
〃	一		〃	一六〇
〃	一		〃	一六一
〃	一		〃	一六二
〃	一		〃	一六三
〃	一		〃	一六四
〃	一		〃	一六五
〃	一		〃	一六六
〃	一		〃	一六七
〃	一		〃	一六八
〃	一		〃	一六九
〃	一		〃	一七〇
〃	一		〃	一七一
〃	一		〃	一七二
〃	一		〃	一七三
〃	一		〃	一七四
〃	一		〃	一七五
〃	一		〃	一七六
〃	一		〃	一七七
〃	一		〃	一七八
〃	一		〃	一七九
〃	一		〃	一八〇
〃	一		〃	一八一
〃	一		〃	一八二
〃	一		〃	一八三
〃	一		〃	一八四
〃	一		〃	一八五
〃	一		〃	一八六
〃	一		〃	一八七
〃	一		〃	一八八
〃	一		〃	一八九
〃	一		〃	一九〇
〃	一		〃	一九一
〃	一		〃	一九二
〃	一		〃	一九三
〃	一		〃	一九四
〃	一		〃	一九五
〃	一		〃	一九六
〃	一		〃	一九七
〃	一		〃	一九八
〃	一		〃	一九九
〃	一		〃	二〇〇
〃	一		〃	二〇一
〃	一		〃	二〇二
〃	一		〃	二〇三
〃	一		〃	二〇四
〃	一		〃	二〇五
〃	一		〃	二〇六
〃	一		〃	二〇七
〃	一		〃	二〇八
〃	一		〃	二〇九
〃	一		〃	二一〇
〃	一		〃	二一一
〃	一		〃	二一二
〃	一		〃	二一三
〃	一		〃	二一四
〃	一		〃	二一五
〃	一		〃	二一六
〃	一		〃	二一七
〃	一		〃	二一八
〃	一		〃	二一九
〃	一		〃	二二〇
〃	一		〃	二二一
〃	一		〃	二二二
〃	一		〃	二二三
〃	一		〃	二二四
〃	一		〃	二二五
〃	一		〃	二二六
〃	一		〃	二二七
〃	一		〃	二二八
〃	一		〃	二二九
〃	一		〃	二三〇
〃	一		〃	二三一
〃	一		〃	二三二
〃	一		〃	二三三
〃	一		〃	二三四
〃	一		〃	二三五
〃	一		〃	二三六
〃	一		〃	二三七
〃	一		〃	二三八
〃	一		〃	二三九
〃	一		〃	二四〇
〃	一		〃	二四一
〃	一		〃	二四二
〃	一		〃	二四三
〃	一		〃	二四四
〃	一		〃	二四五
〃	一		〃	二四六
〃	一		〃	二四七
〃	一		〃	二四八
〃	一		〃	二四九
〃	一		〃	二五〇
〃	一		〃	二五一
〃	一		〃	二五二
〃	一		〃	二五三
〃	一		〃	二五四
〃	一		〃	二五五
〃	一		〃	二五六
〃	一		〃	二五七
〃	一		〃	二五八
〃	一		〃	二五九
〃	一		〃	二六〇
〃	一		〃	二六一
〃	一		〃	二六二
〃	一		〃	二六三
〃	一		〃	二六四
〃	一		〃	二六五
〃	一		〃	二六六
〃	一		〃	二六七
〃	一		〃	二六八
〃	一		〃	二六九
〃	一		〃	二七〇
〃	一		〃	二七一
〃	一		〃	二七二
〃	一		〃	二七三
〃	一		〃	二七四
〃	一		〃	二七五
〃	一		〃	二七六
〃	一		〃	二七七
〃	一		〃	二七八
〃	一		〃	二七九
〃	一		〃	二八〇
〃	一		〃	二八一
〃	一		〃	二八二
〃	一		〃	二八三
〃	一		〃	二八四
〃	一		〃	二八五
〃	一		〃	二八六
〃	一		〃	二八七
〃	一		〃	二八八
〃	一		〃	二八九
〃	一		〃	二九〇
〃	一		〃	二九一
〃	一		〃	二九二
〃	一		〃	二九三
〃	一		〃	二九四
〃	一		〃	二九五
〃	一		〃	二九六
〃	一		〃	二九七
〃	一		〃	二九八
〃	一		〃	二九九
〃	一		〃	三〇〇
〃	一		〃	三〇一
〃	一		〃	三〇二
〃	一		〃	三〇三
〃	一		〃	三〇四
〃	一		〃	三〇五
〃	一		〃	三〇六
〃	一		〃	三〇七
〃	一		〃	三〇八
〃	一		〃	三〇九
〃	一		〃	三一〇
〃	一		〃	三一一
〃	一		〃	三一二
〃	一		〃	三一三
〃	一		〃	三一四
〃	一		〃	三一五
〃	一		〃	三一六
〃	一		〃	三一七
〃	一		〃	三一八
〃	一		〃	三一九
〃	一		〃	三二〇
〃	一		〃	三二一
〃	一		〃	三二二
〃	一		〃	三二三
〃	一		〃	三二四
〃	一		〃	三二五
〃	一		〃	三二六
〃	一		〃	三二七
〃	一		〃	三二八
〃	一		〃	三二九
〃	一		〃	三三〇
〃	一		〃	三三一
〃	一		〃	三三二
〃	一		〃	三三三
〃	一		〃	三三四
〃	一		〃	三三五
〃	一		〃	三三六
〃	一		〃	三三七
〃	一		〃	三三八
〃	一		〃	三三九
〃	一		〃	三四〇
〃	一		〃	三四一
〃	一		〃	三四二
〃	一		〃	三四三
〃	一		〃	三四四
〃	一		〃	三四五
〃	一		〃	三四六
〃	一		〃	三四七
〃	一		〃	三四八
〃	一		〃	三四九
〃	一		〃	三五〇
〃	一		〃	三五一
〃	一		〃	三五二
〃	一		〃	三五三
〃	一		〃	三五四
〃	一		〃	三五五
〃	一		〃	三五六
〃	一		〃	三五七
〃	一		〃	三五八
〃	一		〃	三五九
〃	一		〃	三六〇
〃	一		〃	三六一
〃	一		〃	三六二
〃	一		〃	三六三
〃	一		〃	三六四
〃	一		〃	三六五
〃	一		〃	三六六
〃	一		〃	三六七
〃	一		〃	三六八
〃	一		〃	三六九
〃	一		〃	三七〇
〃	一		〃	三七一
〃	一		〃	三七二
〃	一		〃	三七三
〃	一		〃	三七四
〃	一		〃	三七五
〃	一		〃	三七六
〃	一		〃	三七七
〃	一		〃	三七八
〃	一		〃	三七九
〃	一		〃	三八〇
〃	一		〃	三八一
〃	一		〃	三八二
〃	一		〃	三八三
〃	一		〃	三八四
〃	一		〃	三八五
〃	一		〃	三八六
〃	一		〃	三八七
〃	一		〃	三八八
〃	一		〃	三八九
〃	一		〃	三九〇
〃	一		〃	三九一
〃	一		〃	三九二
〃	一		〃	三九三
〃	一		〃	三九四
〃	一		〃	三九五
〃	一		〃	三九六
〃	一		〃	三九七
〃	一		〃	三九八
〃	一		〃	三九九
〃	一		〃	四〇〇
〃	一		〃	四〇一
〃	一		〃	四〇二
〃	一		〃	四〇三
〃	一		〃	四〇四
〃	一		〃	四〇五
〃	一		〃	四〇六
〃	一		〃	四〇七
〃	一		〃	四〇八
〃	一		〃	四〇九
〃	一		〃	四一〇
〃	一		〃	四一一
〃	一		〃	四一二
〃	一		〃	四一三
〃	一		〃	四一四
〃	一		〃	四一五
〃	一		〃	四一六
〃	一		〃	四一七
〃	一		〃	四一八
〃	一		〃	四一九
〃	一		〃	四二〇
〃	一		〃	四二一
〃	一		〃	四二二
〃	一		〃	四二三
〃	一		〃	四二四
〃	一		〃	四二五
〃	一		〃	四二六
〃	一		〃	四二七
〃	一		〃	四二八
〃	一		〃	四二九
〃	一		〃	四三〇
〃	一		〃	四三一
〃	一		〃	四三二
〃	一		〃	四三三
〃	一		〃	四三四
〃	一		〃	四三五
〃	一		〃	四三六
〃	一		〃	四三七
〃	一		〃	四三八
〃	一		〃	四三九
〃	一		〃	四四〇
〃	一		〃	四四一
〃	一		〃	四四二
〃	一		〃	四四三
〃	一		〃	四四四
〃	一		〃	四四五
〃	一		〃	四四六
〃	一		〃	四四七
〃	一		〃	四四八
〃	一		〃	四四九
〃	一		〃	四五〇
〃	一		〃	四五一
〃	一		〃	四五二
〃	一		〃	四五三
〃	一		〃	四五四
〃	一		〃	四五五
〃	一		〃	四五六
〃	一		〃	四五七
〃	一		〃	四五八
〃	一		〃	四五九
〃	一		〃	四六〇
〃	一		〃	四六一
〃	一		〃	四六二
〃	一		〃	四六三
〃	一		〃	四六四
〃	一		〃	四六五
〃	一		〃	四六六
〃	一		〃	四六七
〃	一		〃	四六八
〃	一		〃	四六九
〃	一		〃	四七〇
〃	一		〃	四七一
〃	一		〃	四七二
〃	一		〃	四七三
〃	一		〃	四七四
〃	一		〃	四七五
〃	一		〃	四七六
〃	一		〃	四七七
〃	一		〃	四七八
〃	一		〃	四七九
〃	一		〃	四八〇
〃	一		〃	四八一
〃	一		〃	四八二
〃	一		〃	四八三
〃	一		〃	四八四
〃	一		〃	四八五
〃	一		〃	四八六
〃	一		〃	四八七
〃	一		〃	四八八
〃	一		〃	四八九
〃	一		〃	四九〇
〃	一		〃	四九一
〃	一		〃	四九二
〃	一		〃	四九三
〃	一		〃	四九四
〃	一		〃	四九五
〃	一		〃	四九六
〃	一		〃	四九七
〃	一		〃	四九八
〃	一		〃	四九九
〃	一		〃	五〇〇
〃	一		〃	五〇一
〃	一		〃	五〇二
〃	一		〃	五〇三
〃	一		〃	五〇四
〃	一		〃	五〇五
〃	一		〃	五〇六
〃	一		〃	五〇七
〃	一		〃	五〇八
〃	一		〃	五〇九
〃	一		〃	五一〇
〃	一		〃	五一一
〃	一		〃	五一二
〃	一		〃	五一三
〃	一		〃	五一四
〃	一		〃	五一五
〃	一		〃	五一六
〃	一		〃	五一七
〃	一		〃	五一八
〃	一		〃	五一九
〃	一		〃	五二〇
〃	一		〃	五二一
〃	一		〃	五二二
〃	一		〃	五二三
〃	一		〃	五二四
〃	一		〃	五二五
〃	一		〃	五二六
〃	一		〃	五二七
〃	一		〃	五二八
〃	一		〃	五二九
〃	一		〃	五三〇
〃	一		〃	五三一
〃	一		〃	五三二
〃	一		〃	五三三
〃	一		〃	五三四
〃	一		〃	五三五
〃	一		〃	五三六
〃	一		〃	五三七
〃	一		〃	五三八
〃	一		〃	五三九
〃	一		〃	五四〇
〃	一		〃	五四一
〃	一		〃	五四二
〃	一		〃	五四三
〃	一		〃	五四四
〃	一		〃	五四五
〃	一		〃	五四六
〃	一		〃	五四七
〃	一		〃	五四八
〃	一		〃	五四九
〃	一		〃	五五〇
〃	一		〃	五五一
〃	一		〃	五五二
〃	一		〃	五五三
〃	一		〃	五五四
〃	一		〃	五五五
〃	一		〃	五五六
〃	一		〃	五五七
〃	一		〃	五五八
〃	一		〃	五五九
〃	一		〃	五六〇
〃	一		〃	五六一
〃	一		〃	五六二
〃	一		〃	五六三
〃	一		〃	五六四
〃	一		〃	五六五
〃	一		〃	五六六
〃	一		〃	五六七
〃	一		〃	五六八
〃	一		〃	五六九
〃	一		〃	五七〇
〃	一		〃	五七一
〃	一		〃	五七二
〃	一		〃	五七三
〃	一		〃	五七四
〃	一		〃	五七五
〃	一		〃	五七六
〃	一		〃	五七七
〃	一		〃	五七八
〃	一		〃	五七九
〃	一		〃	五八〇
〃	一		〃	五八一
〃	一		〃	五八二
〃	一		〃	五八三
〃	一		〃	五八四
〃	一		〃	五八五
〃	一		〃	五八六
〃	一		〃	五八七
〃	一		〃	五八八
〃	一		〃	五八九
〃	一		〃	五九〇
〃	一		〃	五九一
〃	一		〃	五九二
〃	一		〃	五九三
〃	一		〃	五九四
〃	一		〃	五九五
〃	一		〃	五九六
〃	一		〃	五九七
〃	一		〃	五九八
〃	一		〃	五九九
〃	一		〃	六〇〇
〃	一		〃	六〇一
〃	一		〃	六〇二
〃	一		〃	六〇三
〃	一		〃	六〇四
〃	一		〃	六〇五
〃	一		〃	六〇六
〃	一		〃	六〇七
〃	一		〃	六〇八
〃	一		〃	六〇九
〃	一		〃	六一〇
〃	一		〃	六一一
〃	一		〃	六一二
〃	一		〃	六一三
〃	一		〃	六一四
〃	一		〃	六一五
〃	一		〃	六一六
〃	一		〃	六一七
〃	一		〃	六一八
〃	一		〃	六一九
〃	一		〃	六二〇
〃	一		〃	六二一
〃	一		〃	六二二
〃	一		〃	六二三
〃	一		〃	六二四
〃	一		〃	六二五
〃	一		〃	六二六
〃	一		〃	六二七
〃	一		〃	六二八
〃	一		〃	六二九
〃	一		〃	六三〇
〃	一		〃	六三一
〃	一		〃	六三二

Hosei University Repository

弘化	二	二	〃	六	一
〃	三	一	安政	元	三
〃	四	三	〃	二	三
嘉永	元	一	〃	三	二
〃	二	三	〃	四	二
〃	三	一	〃	五	一
〃	四	一	〃	六	一
〃	五	二	万延	元	一
					計三六九名

師海上随鷗没後その遺志をついで藤林普山と刑屍の解剖を行ってから俄かに京師における小森桃塢の名声はあがった。そのことは文化十年頃から年々入門者の数も増加し、文政年間を通じて毎年十数人の入門者を持続していることからもうなずける。天保十四年病没後の門人録は急激に減じていった。

(22) 穂亭老人 『西洋学家訳述目録』 嘉永五年刊。

(23) 「シーボルト先生江戸参府日記」(前掲 『シーボルト先生其生涯及功業』 一八〇頁)

(24) 『土生玄碩先生第百五十年記念会贈位祝典記事』

(25) 同書。

(26) 呉秀三博士 『土生玄碩先生伝』(同右書所収)

(27) 伊東栄氏 『伊東玄朴伝』

(28) 同書一三五頁。

(29) 原平三氏前掲論文

(30) 浦上五六氏 「適塾の人々」 一〇〇頁参見。

(31) 福沢諭吉 『福翁自伝』

(32) 長与専斉 『松香私志』

(33) 嘉永六年ペルリ浦賀来航の翌年に書いた洪庵の手紙の一つ (緒方富雄博士 『緒方洪庵伝』 八〇頁)

(34) 宮本仲氏 『佐久間象山』 五六六・五九七頁。

(35) 池田哲郎氏 「佐久間象山と蘭学」(福島大学学芸学部論集第10号)

(36) 「入門生姓名録」(小沢清躬博士 『蘭学者川本幸民』所収。

(37) 「弟子籍」(丹潔氏編 『大村益次郎』所収) また同書一六六―一七〇頁に 『学科要目』 をかいた手帳が収めてある。

(38) 村田峯次郎氏 『大村益次郎先生事蹟』 三七頁。

(39) 松本順 『蘭疇』 (明治文化全集・二十四巻科学篇四七〇頁)

(40) 同書。

(41) 鈴木要吾氏 『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』 巻末所収。

(42) 「贈従五位入沢恭平先生日記」

(43) 鈴木要吾氏前掲書三五頁。

(44) 母は田辺氏の養女で、その姓は和田。

(45) 理由は荘内藩転封(鶴岡藩酒井侯→長岡)阻止運動を佐藤泰然父子強く行い、為に老中水野越前守の怨を受けて身の危険を感じたので水野越前守を快く思っていなかった堀田正睦の城下に難を避けたのである。

(46) 村上一郎氏 『蘭医佐藤泰然』 一三八頁に写真版を以て掲載。

(47) 佐藤泰然に関しては、村上一郎氏 『蘭医佐藤泰然』 及び 「佐倉藩の問学と蘭学者」 (蘭学資料研究会研究報告第三五号) に負うところ大である。

(48) 田中助一氏 『青木周弼』

(49) 同書。

(50) この項、呉秀三博士 『蜚作阮甫』 に負うところ大。

(51) 有馬成甫博士 『高島秋帆』 (人物双書) 六一頁。

(52) 同書七二頁。

(53) 大槻如電 『新撰洋学年表』 一五二頁下段。

(54) 勝海舟 「陸軍歴史」 巻十 (『海舟全集』 所収)

(55) 有島成甫博士前掲書一五二頁。

(56) 同書 「高島流の伝播」 の項。

(57) 横山健堂氏 『人物研究と史論』 大正二年 八九頁。

(58) 戸羽山瀚氏編 「江川坦庵全集」 上下。(昭和二九―三〇年)

(59) 写本。上野図書館蔵。

(60) 杉田玄白 『蘭学事始』 下。